

大鏡

三

卷五

攝政

謙德公

伊尹

攝政

忠義公

兼通

恒德公為光

仁義公公季

攝政

大入道殿

兼家

已上九條殿息

卷六

中關白

内大臣道隆

栗田關白

右大臣道兼

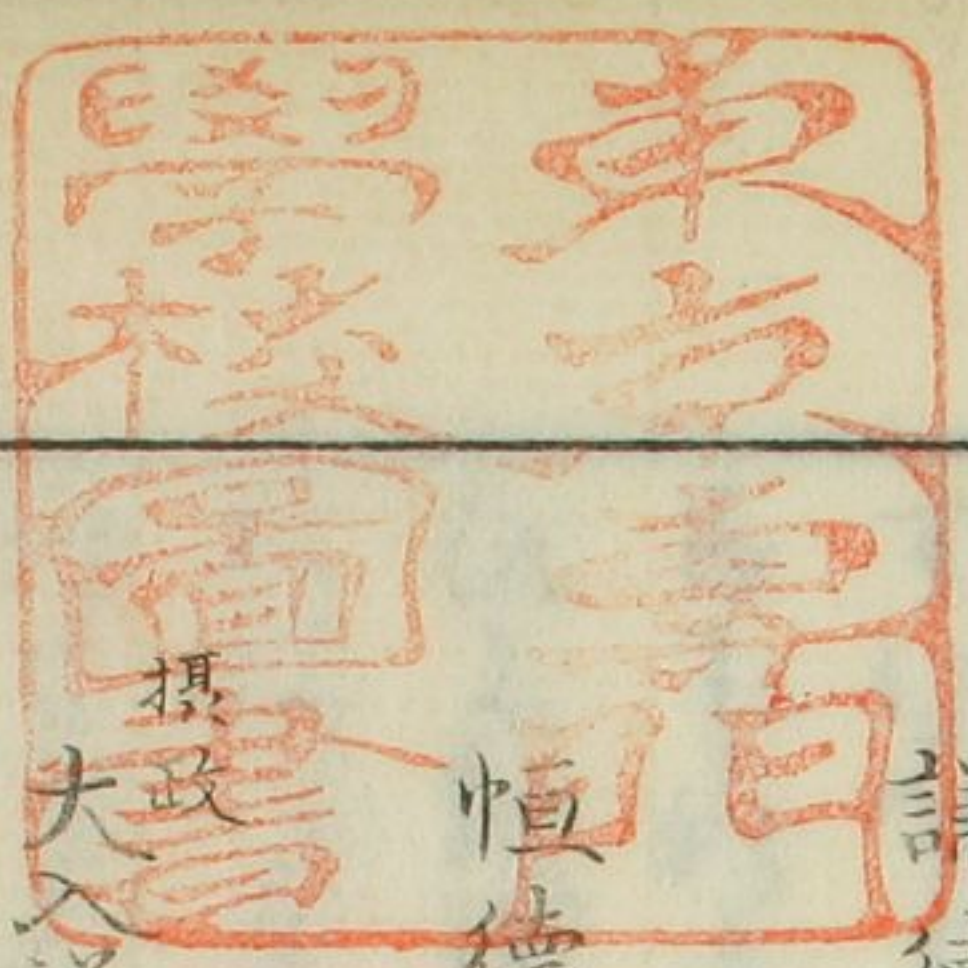
東三條殿息

5
利
299
3



利
208
3

門制5
號294
卷1



大鏡卷之五目錄

攝政

謙德公 伊尹

恒德公 為光

攝政
大入道 敏兼家

攝政

忠義公 兼通

仁義公 公季

已上九條殿息

大鏡 卷之五

目一

大鏡卷之五
 一 太政大臣伊弉
 このねらむる一 条攝政と申せ九條殿の一男たりま
 すいふべきは流集はくりにて豊景トヨカゲと申せしむるまへり大
 后下りしつゝえ終ひて三年天禄三年十一月一日失せ終
 ひよまた清和四年四月いよる謙徳ケントクと申せしむるまへり失
 にはましたる事と九條殿の流遺言ユヰゴトをたゞへらせ終へら
 けとらる人からしむるまへりいよるまへりたはしむるまへり
 流葬送のしるしをむらり略定リヤクテイと申せしむるまへりけまへ
 いよるまへりいよるまへりいよるまへりいよるまへりいよるまへり
 きよるまへりいよるまへりいよるまへりいよるまへりいよるまへり
 大鏡卷之五
 一

ちり事もあつていふにわづらひく事なきに思ふにいと
せしむるにわづらひく事なきに思ふにいと
あつていふにわづらひく事なきに思ふにいと
あつていふにわづらひく事なきに思ふにいと

あつていふにわづらひく事なきに思ふにいと

あつていふにわづらひく事なきに思ふにいと
あつていふにわづらひく事なきに思ふにいと
あつていふにわづらひく事なきに思ふにいと
あつていふにわづらひく事なきに思ふにいと

三門のほをむらふ東のたふらひに攝政せし來り給へを世申る
よのほをむらふ東のたふらひに攝政せし來り給へを世申る
て大谷せさせ給ふは復敷のうら板のかのくもくろくろり
ふきを俄にほらんとけしむるの國がもほほほほ
おさせ給へむらふ東のたふらひに攝政せし來り給へを世申る
よのほをむらふ東のたふらひに攝政せし來り給へを世申る
の氏寺にむらふ東のたふらひに攝政せし來り給へを世申る
てん給ふまをむらふ東のたふらひに攝政せし來り給へを世申る
小あつていふにわづらひく事なきに思ふにいと
あつていふにわづらひく事なきに思ふにいと

うせきあはれ入らあししちかたしむまにいんまはらせ
 めまうびいさうきんをこころにきりし其法をいひて女子
 考しつらあまのこははしあはれ女君一人を治泉院の時
 の女也あそが山院の母、増皇后宮にすせ給ひし女
 つねの女君一人を法住寺の大母の女方にすつて給ひ
 せきあはれしよた九の君を治泉院の禪為尊にまかせしはらへ
 ておはせしきそのみやうせあまのひてのちあまたて
 いみじうたまたしつめておをいぬめり、又忠君の兵衛督の
 小方にすおはせし後あそ六条の左大臣殿の女子の右大
 母のうへまはたはしつらあはれし又山院の時

宗子

尊子

重信

致方

いもつら女一宮宗子はらせ給ひし女二尊子を治泉院の時
 齋院またせ給ひて園融院の時、女重信をまかり給へり
 一ふともれくうまのちしうき大宮とすの人もつげあ
 てまつりたはて二二度まかり給ひてのちほどもちう
 せきあはれしよた九の君を治泉院の禪為尊にまかせしはらへ
 ておはせしきそのみやうせあまのひてのちあまたて
 いみじうたまたしつめておをいぬめり、又忠君の兵衛督の
 小方にすおはせし後あそ六条の左大臣殿の女子の右大
 母のうへまはたはしつらあはれし又山院の時

奉賢

義孝

ヨアキラ

ミコ

伊尹

母の御事... 義孝^{ヨシタカ}... 方便口を講... 小方の...

母の御事... 阿闍梨^{アザリ}... 阿闍梨^{アザリ}... 阿闍梨^{アザリ}...

おはま〜んまは〜ん生精進を〜め終るまづ〜
し事ら〜か〜まは〜んまは〜ん生精進を〜め終るまづ〜
る終ら〜んまは〜んまは〜ん生精進を〜め終るまづ〜
は〜んまは〜んまは〜ん生精進を〜め終るまづ〜
〜まは〜んまは〜ん生精進を〜め終るまづ〜
み〜んまは〜んまは〜ん生精進を〜め終るまづ〜
こ〜んまは〜んまは〜ん生精進を〜め終るまづ〜
〜まは〜んまは〜ん生精進を〜め終るまづ〜
〜まは〜んまは〜ん生精進を〜め終るまづ〜
〜まは〜んまは〜ん生精進を〜め終るまづ〜
〜まは〜んまは〜ん生精進を〜め終るまづ〜

は〜んまは〜んまは〜ん生精進を〜め終るまづ〜
〜まは〜んまは〜ん生精進を〜め終るまづ〜
お〜んまは〜んまは〜ん生精進を〜め終るまづ〜
〜まは〜んまは〜ん生精進を〜め終るまづ〜
せ〜んまは〜んまは〜ん生精進を〜め終るまづ〜
〜まは〜んまは〜ん生精進を〜め終るまづ〜
手〜んまは〜んまは〜ん生精進を〜め終るまづ〜
但〜ん守実經の若尾張の權守良經の若入も、若清の二位
の女も〜んまは〜んまは〜ん生精進を〜め終るまづ〜
の若子高松が〜んまは〜んまは〜ん生精進を〜め終るまづ〜
若入も〜んまは〜んまは〜ん生精進を〜め終るまづ〜

び給へりしに、行成の御名を、源氏の御名を、行成の御名を、源氏の御名を、
 ばも、源氏の御名を、行成の御名を、源氏の御名を、行成の御名を、
 を、源氏の御名を、行成の御名を、源氏の御名を、行成の御名を、
 あり、源氏の御名を、行成の御名を、源氏の御名を、行成の御名を、
俊賢の御名を、源氏の御名を、行成の御名を、源氏の御名を、
 部俊賢の御名を、源氏の御名を、行成の御名を、源氏の御名を、
 を、源氏の御名を、行成の御名を、源氏の御名を、行成の御名を、
 ざり、源氏の御名を、行成の御名を、源氏の御名を、行成の御名を、
 にい、源氏の御名を、行成の御名を、源氏の御名を、行成の御名を、
 民部源氏の御名を、行成の御名を、源氏の御名を、行成の御名を、

給ひ、源氏の御名を、行成の御名を、源氏の御名を、行成の御名を、
 あり、源氏の御名を、行成の御名を、源氏の御名を、行成の御名を、
 る、源氏の御名を、行成の御名を、源氏の御名を、行成の御名を、
 殿と人よ、源氏の御名を、行成の御名を、源氏の御名を、行成の御名を、
 の、源氏の御名を、行成の御名を、源氏の御名を、行成の御名を、
 き、源氏の御名を、行成の御名を、源氏の御名を、行成の御名を、
 て、源氏の御名を、行成の御名を、源氏の御名を、行成の御名を、
 る、源氏の御名を、行成の御名を、源氏の御名を、行成の御名を、
 及び、源氏の御名を、行成の御名を、源氏の御名を、行成の御名を、

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Arabic or Persian calligraphy, filling the main body of both pages. The text is arranged in approximately 15 horizontal lines per page, written from right to left. The script is dense and fluid, characteristic of historical Islamic manuscripts.

大鏡卷之五
西洞
今に各處の道にありて
大納言殿より
和歌の
論義と
大納言殿
の
道
に
あり
て
各
處
の
道
に
あり
て
大
納
言
殿
よ
り
和
歌
の
論
義
と
大
納
言
殿
の
道
に
あり
て

大鏡卷之五
西洞
今に各處の道にありて
大納言殿より
和歌の
論義と
大納言殿
の
道
に
あり
て
各
處
の
道
に
あり
て
大
納
言
殿
よ
り
和
歌
の
論
義
と
大
納
言
殿
の
道
に
あり
て

Handwritten text in Kuzushiji style, consisting of approximately 12 horizontal lines. The script is dense and characteristic of the Kamakura period.

後一条

Handwritten text in Kuzushiji style, consisting of approximately 12 horizontal lines. The script is dense and characteristic of the Kamakura period.

ガクノフ 樂府

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Arabic or Persian calligraphy. The text is arranged in approximately 12 horizontal lines across the page.

義懷

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Arabic or Persian calligraphy. The text is arranged in approximately 12 horizontal lines across the page.

らわらむとてさへおぼせたまへたいや大なるゆづりされば源氏
部々たる衆院のころよりたはらひのころよりさうぢりちり
物なきと申されども入道殿といふ不使たる事哉も申
るゝふゆいなきからまぬいふいふいふはせぬいふり
この義懐の中納言の庄出ぬ惟成の年はすめせぬえられ
ふいふちりちりいふいふいふいふいふいふいふいふ
よとていふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
えせせられればいふいふいふいふいふいふいふいふ
もやいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
すえいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

くたはれいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
まのいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
ちりいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
女を定むいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
若くは院は出家の本意もいふいふいふいふいふいふいふ
修行せむいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
ある哉は杖ていふいふいふいふいふいふいふいふいふ
きりやいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

たさきよなびがたてんりし

後拾遺^九

のふみとさきよのつとめをばたかひにうか
 らせりしにばたかひにうかたてぬるに
 しむるにうかたてぬるにうかたてぬるに
 うかたてぬるにうかたてぬるに
 うかたてぬるにうかたてぬるに
 うかたてぬるにうかたてぬるに
 うかたてぬるにうかたてぬるに
 うかたてぬるにうかたてぬるに
 うかたてぬるにうかたてぬるに
 うかたてぬるにうかたてぬるに

又國の位をすそ給ひし出家の法功徳のむかし
 にしうねはしよふこめしやふはしうりにおし
 せ給ひし心法をも解意せ給ふ事なりとてこれ
 にいよあやもはしむるにやまはたまたは
 物のたのしみはしむるにやまはたまたは
 にもつ象院の南の院うねはしよふ時城亡あり
 法をのりてまをり給ひしやまはたまたは
 きあしりて法教の院を法軍にむら二条所をりの法
 あつせ給ひし心法をも解意せ給ふ事なりとてこれ

Handwritten text in a cursive style, likely a sutra or liturgical text. The script is dense and continuous across the page.

Handwritten text in a cursive style, likely a sutra or liturgical text. The script is dense and continuous across the page.

はらひの人のえ路ひなをのあはほをまほたふ、自信こそ
ほもたふまゝもつらふもたふたふりもほもそくせほ
まゝ貫たぬまゝもつらふもたふたふりもほもそくせほ
歌ぞ

いふまゝにほをのあはほをまほたふ、自信こそ
ほもたふまゝもつらふもたふたふりもほもそくせほ
まゝ貫たぬまゝもつらふもたふたふりもほもそくせほ
歌ぞ

まほたふまゝもつらふもたふたふりもほもそくせほ
まゝ貫たぬまゝもつらふもたふたふりもほもそくせほ
歌ぞ

法皇御入道... 皇太子... 天延六年七月十日... 中宮... 年六月二日...

大鏡卷之五... 天延六年七月十日... 中宮... 年六月二日...

あらむたなま〜
 おぼやんごらね〜
 とららのひめ志肉侍のか〜
 おは〜まひ六条左大臣重信の流子の渡乗方のう〜
 び〜のや又大臣若と顯アキミツと〜
 乙申七月廿日在大長〜
 壬午七月二十四日〜
 二十五日〜
 人惡アキラヤサのたのた〜
 流名〜

と村とのさ帝盛子のむねの〜
 流〜
 し〜
 識に〜
 にい〜
 う〜
 香殿キヤウテンの女流〜
 ろ〜
 よ〜
 ほ〜

宰相を召しよりにていふはあまにちもつたはなほあはれい
しとらち今のかつ余^{敦明}院のまじ武部への宮へしとら
むいごりまあせ召しよるにぞと東宮にありせ召しよ
きられしとまよはざりしかば復はまわらぬまのし
るに廣のるにげあつあつせ召しよるにぞとら
まもつらうせ召しよるにぞとらまもつらうせ召しよ
女^{顯光}流も父に召しよるにぞとらまもつらうせ召しよ
まもつらうせ召しよるにぞとらまもつらうせ召しよ
はまもつらうせ召しよるにぞとらまもつらうせ召しよ
ごごりてまもつらうせ召しよるにぞとらまもつらうせ

つきあつらせ召しよるにぞとらまもつらうせ召しよ
ごごりてまもつらうせ召しよるにぞとらまもつらうせ
らの親まの流も父に召しよるにぞとらまもつらうせ
おせよるに又閑院左大将おえとらまもつらうせ召しよ
はしまつらうせ召しよるにぞとらまもつらうせ召しよ
ごごりてまもつらうせ召しよるにぞとらまもつらうせ
あまもつらうせ召しよるにぞとらまもつらうせ召しよ
えまもつらうせ召しよるにぞとらまもつらうせ召しよ
のふまもつらうせ召しよるにぞとらまもつらうせ召しよ
水晶^{スササウ}のまもつらうせ召しよるにぞとらまもつらうせ

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Arabic or Persian calligraphy, filling the right page of the manuscript.

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Arabic or Persian calligraphy, filling the left page of the manuscript.

一 兼通 又堀河の... 後の中... 兼通 又堀河の... 後の中... 兼通 又堀河の... 後の中...

一 兼家 東三條... 兼家 東三條... 兼家 東三條... 兼家 東三條...

Handwritten text in cursive style, likely a transcription of a historical document. The text is written vertically on the right page of the open book.

Handwritten text in cursive style, likely a transcription of a historical document. The text is written vertically on the left page of the open book. Includes the characters '明池' and '東之條'.

んこのまゝ大将もいふあまのまゝくねぼめは、大将を
うせらるるまゝうたせりて、鬼の間のものにねはぬ、
白敷はまへうつゝいゝる路ひて、いふまゝに、
最後の除目サイゴトモクにせぬいふまゝあり、路ひるまゝに、
頭めして、関白を頼忠のちまゝ、東之條殿の大將を
まゝ、一條の濟時ナリトキの中納言を大将に、まゝに、
旨く、東之條殿を治部とせぬ、まゝに、
させたまひて、はなれくせ、路ひるまゝに、
ねはせぬ、教せし、はなれくせ、路ひるまゝに、
うせらるるまゝに、まゝに、

も、まゝに、
また、まゝに、
は、まゝに、
次第のまゝに、
も、まゝに、
が、まゝに、
は、まゝに、
の、まゝに、
は、まゝに、

一太政大臣為光

くん入道道長殿の齊信に、
けきを左衛門督の誠信の
中務信の、
かこも入道、
門督信の、
中務信の、
ちかたまし、
きよし、
くろく除目のチモクあり、
齋信ダガ道長に、

くろく入道、
よもりの、
に、
おをせ、
て、
に、
おをせ、
みい、
くろく入道、

頭中将顯泰の君の御方よりおははるめをさし君
をを御方よりの大政大臣殿公季よりおはるに
公威つけまうせ給へしとて、藏人頭よりおはるに
に、おはるに、君にさし、大政大臣殿の御方より
く、おはるに、君にさし、大政大臣殿の御方より
と、おはるに、君にさし、大政大臣殿の御方より
さ、おはるに、君にさし、大政大臣殿の御方より
は、おはるに、君にさし、大政大臣殿の御方より
つ、おはるに、君にさし、大政大臣殿の御方より
ま、おはるに、君にさし、大政大臣殿の御方より

と、おはるに、君にさし、大政大臣殿の御方より
ら、おはるに、君にさし、大政大臣殿の御方より
ま、おはるに、君にさし、大政大臣殿の御方より
九条殿は、女房より、おはるに、君にさし、大政大臣殿の御方より
お、おはるに、君にさし、大政大臣殿の御方より
も、おはるに、君にさし、大政大臣殿の御方より
ら、おはるに、君にさし、大政大臣殿の御方より
お、おはるに、君にさし、大政大臣殿の御方より
め、おはるに、君にさし、大政大臣殿の御方より
く、おはるに、君にさし、大政大臣殿の御方より

且及はるまわさる路へる目をかたはらひては日にとりたはら
まふちりつゝおのせ路をいへりていふたはりてはま
を九条殿とふたまはらせ路へぬまをいへりてはま
らとていふていふていふていふていふていふていふ
まをらせたまへりて太政大臣公季をいへりてはあとの中宮安子をいへ
るていふていふていふていふていふていふていふ
ていふていふていふていふていふていふていふ
ていふていふていふていふていふていふていふ
ていふていふていふていふていふていふていふ
ていふていふていふていふていふていふていふ

めくは其のたはりていふていふていふていふていふ
けいふていふていふていふていふていふていふ
だちていふていふていふていふていふていふ
路をいへりていふていふていふていふていふ
ていふていふていふていふていふていふていふ
路へまはりていふていふていふていふていふ
らていふていふていふていふていふていふ
のふていふていふていふていふていふていふ
のふていふていふていふていふていふていふ
がやちていふていふていふていふていふていふ

かゝるもいふに又去るもまづの頭中将と成るをいふはかゝる
ふかゝるもいふに又去るもまづの頭中将と成るをいふはかゝる
たぬいふに又去るもまづの頭中将と成るをいふはかゝる
こは思はるもいふに又去るもまづの頭中将と成るをいふはかゝる
まゝあつたは思はるもいふに又去るもまづの頭中将と成るをいふはかゝる
人たぬいふに又去るもまづの頭中将と成るをいふはかゝる
ら思はるもいふに又去るもまづの頭中将と成るをいふはかゝる
養に東宮の行勢あるは車にら思はるもいふに又去るもまづの頭中将と成るをいふはかゝる
とみらに成るもいふに又去るもまづの頭中将と成るをいふはかゝる
ひらに成るもいふに又去るもまづの頭中将と成るをいふはかゝる

うまおはるかから思はるもいふに又去るもまづの頭中将と成るをいふはかゝる
めはるもいふに又去るもまづの頭中将と成るをいふはかゝる
頭中将アキモトの君の思はるもいふに又去るもまづの頭中将と成るをいふはかゝる
日ツに思はるもいふに又去るもまづの頭中将と成るをいふはかゝる
だの右衛門督実成の思はるもいふに又去るもまづの頭中将と成るをいふはかゝる
き思はるもいふに又去るもまづの頭中将と成るをいふはかゝる
と右衛門督の思はるもいふに又去るもまづの頭中将と成るをいふはかゝる
ら思はるもいふに又去るもまづの頭中将と成るをいふはかゝる
殿の思はるもいふに又去るもまづの頭中将と成るをいふはかゝる
ほ思はるもいふに又去るもまづの頭中将と成るをいふはかゝる

よねもいごいごいものさしひきかきまひのゆゑにあらま
りて古代コダイよりおはしつちまひのりき童名のまを
考てこそをやしう。

一 太政大臣兼家

これをもとてくれ九条殿の二弟君東三条のおととににハ
しまひ由毎と一系掎政イハにちるど冷泉院園融院の由を
ぢう一條院三条院の由おとち東三条女院詮子増白皇后宮超子の治
父ちり公親もて二十年大臣の位もて十二年、せももてせ給
ふもちらへて五年おはしつちまひ

別正曆元年七月二日うせきせもまひのりき元年六十一

出家せもあつてくへてくへてのほいひもあつて内にあつ
せもあつてくへてくへての牛車ギツシヤにせ山の陣もあつて
まもあつてくへてくへてのりきあつてくへてあつて
あつてくへてくへてくへてあつてくへてあつて
あつてくへてくへてくへてあつてくへてあつて
あつてくへてくへてくへてあつてくへてあつて
あつてくへてくへてくへてあつてくへてあつて
あつてくへてくへてくへてあつてくへてあつて
あつてくへてくへてくへてあつてくへてあつて
あつてくへてくへてくへてあつてくへてあつて
あつてくへてくへてくへてあつてくへてあつて
あつてくへてくへてくへてあつてくへてあつて

るふ人の中へも一ちがたふ人にちせせぬまにぬまを果
 報ホウのたせせぬまにちせせぬまにぬまを果
 とたせせぬまにちせせぬまにぬまを果
 とたせせぬまにちせせぬまにぬまを果
 とたせせぬまにちせせぬまにぬまを果
 堀川の指政直通の時一、東三條殿とて
 一、時よ人の後、かの堀川の院より矢をわらへん
 が、一、時よ人の後、かの堀川の院より矢をわらへん
 とたせせぬまにちせせぬまにぬまを果
 とたせせぬまにちせせぬまにぬまを果

一、時よ人の後、かの堀川の院より矢をわらへん
 とたせせぬまにちせせぬまにぬまを果
 とたせせぬまにちせせぬまにぬまを果
 とたせせぬまにちせせぬまにぬまを果
 とたせせぬまにちせせぬまにぬまを果
 とたせせぬまにちせせぬまにぬまを果
 とたせせぬまにちせせぬまにぬまを果
 とたせせぬまにちせせぬまにぬまを果
 とたせせぬまにちせせぬまにぬまを果
 とたせせぬまにちせせぬまにぬまを果
 とたせせぬまにちせせぬまにぬまを果

ながらむとていかにいふにまはるけり
 しれどもなほいかにいふにまはるけり
 後原の道領ももなきとていかにいふに
 ながらむとていかにいふにまはるけり
 おらぬまはるけり女にあはれむとていかに
 伸ばぬとていかにいふにまはるけり
 二条の大路にいでていかにいふに
 ながらむとていかにいふにまはるけり
 ながらむとていかにいふにまはるけり
 二条の大路にいでていかにいふに
 ながらむとていかにいふにまはるけり
 伸ばぬとていかにいふにまはるけり
 おらぬまはるけり女にあはれむとていかに
 ながらむとていかにいふにまはるけり

攝津守藤原
時姫
母

ながらむとていかにいふにまはるけり
 しれどもなほいかにいふにまはるけり
 後原の道領ももなきとていかにいふに
 ながらむとていかにいふにまはるけり
 おらぬまはるけり女にあはれむとていかに
 伸ばぬとていかにいふにまはるけり
 二条の大路にいでていかにいふに
 ながらむとていかにいふにまはるけり
 ながらむとていかにいふにまはるけり
 二条の大路にいでていかにいふに
 ながらむとていかにいふにまはるけり
 伸ばぬとていかにいふにまはるけり
 おらぬまはるけり女にあはれむとていかに
 ながらむとていかにいふにまはるけり

院の直ひとつとて此道隆のおもむ内大臣もて関白兼
させ給ひき次郎君を陸奥守倫寧^{トモヤス}ぬの如きはら
ふおとせし君もり道綱と号えし大納言までちりて
右大将のけりもまゝもたらの母君きはめしる和歌の上
手におはしし兼家^{兼家}の我うしたのよらせ給ひ
くるほごめのこと歌もよごのたあつめていげらふの日記
と名づけてせしひろめ給ひておはすまたり
くらに門をおそくあげしれどもいせしはせしとい
ひいせしせしめまゝもた女君
なげきつしむりぬる物もあるまゝいふことしおたせしはら

いせしけりありとたがし

げみやぐよ冬の物ちりぬまの戸もたそあるくらやうのけり
されどそれほりし物ぞかひし道綱退後し東宮傳よた
り給ひて傳ごのころやめししむらつてて大将をも
辞し給ひてたそれ後今の入道ごのし政^{倫子}所のははらら
りししたてまつり給ひてらまわれもまゝし君宰相中将
兼經道命阿闍梨きはめしる和歌の上手におはしし
大納言^{道綱}後と實仁四年十月十二日し出家同十六日にうせ給
ひよたせしと六十六とぞさしめまゝしし大入道居り
此三郎ハ粟田ごの又四郎ハ堀川の治部^{道義}少輔君とてその志

きんぎょよまじらひをせざやと路ひぬまがきり侍り
おのろむらたご今の入道道長のうねはし東三条女院の母時姫
方成ははらの君達こそころびはありさまや侍り昭宣
今の治まらんぬまろこ平とを覚えさひめりよ時平 仲平 忠平
ろをぞと道とやきの人やけんえとそけりつらびあり
いかにそくそむ
大鏡巻の五終

大鏡巻之六目録

中關白
内大臣 道隆
粟田關白
右大臣 道兼

東三条殿息

東三條親忠

内大臣 兼家
中隆白 兼家

大饗茶々六目録

一内大臣道隆

六のおやぶをくら東三條の兼家おとぶ一男あり、清母と女東三
 院條の同腹あり、開白りのりさかえ臨むと、六年をかりや
 おはまーけん大疫癘エキレイの年ころううせらせ終ひたまは
 まむもそれやまひにらあしで、酒キのみぶれはあ
 終ひりしるりなをれとる上戸シヤウゴの興ウケの事コトにす
 まむすむぬをいを不便フビエンなるをりはぶさや祭マツリのころ
 出らんびとて、小一条清時大将朝光院朝光大将朝光と一馬車ムラサキにムラサキ紫野ムラサキふ
 出らせしまひぬ鳥トリのついでるかきまのめにつらせ終ひ
 て興あるもむおたぐして、ともむまむおたぐ酒サケいさく

めひ今日もそらよとまもるくもかよへはちたなよ
ふほふふふふふふふふふふふふふふふふ
は車のもこのくもくもくもくもくもくもくも
ももももももももももももももももももも
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
き事うおがうめいけいけいけいけいけいけ
装束もひきききききききききききききき
乗もももももももももももももももももも
乃殿在醉乃ほふふふふふふふふふふふ

せしまひいいいいいいいいいいいいいい
らけきたまうてまもるくもかよへはちたなよ
みえ禰宜神主も心えて大いけいけいけいけ
いけいけいけいけいけいけいけいけいけい
よのは社うまもり路も道もちもちもちもち
うもももももももももももももももももも
ごりもめいの大納言もこの道長もこの道長
ちいもめいはらんびらう夜入ぬまをは前のおの
ひのりうもほりてはすたのひのおほもまた
あやうもがうめいももももももももももも

此車にのちおたりしもまじくせんせしむるに
おもしむる前ゴゼンにてもえはせしむるに
らふちがたなりし入道殿おたりしむるに
るむちがたなりし外ナガエのちがたなりしむるに
わしむるにせしむるにせしむるに
をねだりしむるに表ウラのむすのむすを
しむるにせしむるにせしむるに
用事なるにせしむるにせしむるに
しむるにせしむるにせしむるに
しむるにせしむるにせしむるに

しむるにせしむるにせしむるに
しむるにせしむるにせしむるに
おはしむるにせしむるにせしむるに
もわしむるにせしむるにせしむるに
ひたる時西ニかきむしるにせしむるに
しむるにせしむるにせしむるに
光ミツなるにせしむるにせしむるに
しむるにせしむるにせしむるに
しむるにせしむるにせしむるに
しむるにせしむるにせしむるに
しむるにせしむるにせしむるに
しむるにせしむるにせしむるに
しむるにせしむるにせしむるに

で奉らせ給ひしきぎと世人いのにぞややはりしはる
關^{道隆}白殿もつとせし給ひて後、^{修子}をこそこつて入
女もて人らみまうせぬまうつとて女宮を入道乃
一品宮とて、二条にたはまひ女二宮を九歳にす
らせ給ひしよと男親王に式部卿の宮敦康親
王とさうやういふまじは思ひぬらひしやう
世もつとてたがもつとせぬまうつとてはる
一にたはあたまうとてやませ給ひしよと冷泉
院の宮建もつとてやうかやうたはまたま
うたひやうかやうたはまうとてやうの人たま

ま、はるまゝいふにのつとてはるつとていふと
くうたもつとてはるまゝに給ひの母後のはらつ
がの君に二条院の東宮とてつとてつとて景舎やそ
をれやうせ給ひしよと父殿うせぬまうつとては
年サニこはつとてつとてつとてつとてつとて
る冷泉のみと帥宮^{敦道}とてつとてつとてつとてつと
またつとつとつとつとつとつとつとつとつと
とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
くつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

かひいそらやみまえ路へかきけるものや、僧客人をぞ
のまゐりたるまじりの、^シ流^スをいふものや、このに
おまへは、おまへに、おまへに、おまへに、おまへに、
まを、まを、まを、まを、まを、まを、まを、まを、
は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、
こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、
ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、
び、び、び、び、び、び、び、び、び、び、び、び、び、び、
又、又、又、又、又、又、又、又、又、又、又、又、又、又、
く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、

けい、けい、けい、けい、けい、けい、けい、けい、けい、けい、
く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
とり、とり、とり、とり、とり、とり、とり、とり、とり、とり、
を見、を見、を見、を見、を見、を見、を見、を見、を見、を見、
ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、
い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
新、新、新、新、新、新、新、新、新、新、新、新、新、新、
一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
え、え、え、え、え、え、え、え、え、え、え、え、え、え、
な、な、な、な、な、な、な、な、な、な、な、な、な、な、

者あはれはまへサの作文サクモンをふみ奉らまへはとよ少く
 のをの子にらまへりてこころおぼえ侍りしはちや
 此折めたるも大盤所オホイロのさよりいまるをま
 でコキ微殿デシのどの處つがわのこころよりさほりて二間フタマに
 ちんちんくみ給ひたるさうしうしうまほりしう古
 体す侍るにや女のあまうりすばえのうらたたるも
 あと人のやちるにげ内侍後ウチノシにちやいさう墮ダ
 落ラクせらまへとそまけさむうおがえ侍りしはらて
 そ此宮コノミヤのうらまへはさきの四の處方ヨシノトをフシゲドシに
 一はのこころいさうつうて式部卿シキブノキミの宮ミヤの母代ハハノトを

おはれまへにまをさうらせ給ひよれた後の女君たち
 あらまへりタイ對の處方とせえし人ヒトの處後トコロノノチも女君た
 ははれ三條院ミチノエの東宮トウミヤとやみくげ後ノチをなげせし
 と今の皇太后宮クニノミヤにさうはらまへ給ひたまはる
 せえ給ひし男君達オトノミと太郎道頼君ノブ故伊豫守イゼノミ守仁ノブの
 女のはらぞか大子代オホコノト君ノブの祖父オホジおはら
 處子オコノにまへ給ひし道頼ミチタカ六郎ロウ君ノブとさそとやし
 大納言オホノリまでさうり給ひし父の園道隆白殿シロノうせま
 年の六月十一日ムツキノエノイヒにさうらせ給ひしは
 むとせえさせ給ひしはのこころいさうしうフシ

里のしつらしつらまゝのしつらしつらとて、拙よりぬけ出せぬやうに
ぞおぼせし。はらへらば、はらへらば、はらへらば、はらへらば、
と似せぬまゝのしつらしつらとて、又さしをのしつらとてはせし
これ後とてははらへらば、はらへらば、皇后宮定子と同は後ハの
男君隆圓法師とて十余アの程、僧都になり奉り終へり
し、そのまゝとて二十六とてうせ終ひぬれ、今一匹ハ小千伊周
代君とてかのほつらつらの大千道頼代君にらるゝとて、はらへ
らるゝとて、二十一におはせしとて、はらへらば、内大臣になり奉
り終ひて、我らせぬまゝのしつらとて、病おぼくちつらま
は、内にならるゝとて、終ひて、はらへらば、まゝのしつらとて

らるゝとて、ぬらとて、此内大臣伊周のおとどとて、百官ヤシ并天
下執行の宣旨終ふべからし、やとて、はらへらば、ぬらとて、
て、我ら出家せしとて、ぬらとて、はらへらば、内大臣伊周後を
関白殿とて、よれ人あつらふらまゝ、はらへらば、粟道
田殿とて、わらとて、はらへらば、手とて、はらへらば、鷹をそと
きとて、むらとて、はらへらば、なげとて、はらへらば、一家にらと
きとて、はらへらば、ちとて、はらへらば、はらへらば、はらへらば、
うとて、夢にぬらとて、はらへらば、はらへらば、はらへらば、はらへらば、
入道殿道長その年の五月十一日より、はらへらば、世をまゝとて、
はらへらば、はらへらば、無トク淨トクとて、はらへらば、まゝとて、程よ

へはひきしやいせしるるにわれをいふと^{道長}殿はらん
 ぶあやいと人々みまじらひくはるるえもわつせ
 ぬうなごいごい随分のそらもきりごと
 あらふにこそまはらふいせむを又もまふふにせ
 らうがましくあるも、^帥殿のそまも人々もいひきり
 ららひあへむをさるる人々をいひまのいひ
 え^五歩このまじらふで^ト登^ウ華^{クワ}殿の細^シ部^ブにあら
 らまたまひきりやあらはるるをいひまのいひ
 ちるにこそ^雜人いひまはるるはるるをいひまのいひ
 きらふもいひまはるるをいひまのいひまのいひ

びんをいひけきとまをいひまのいひまのいひ
 ららひあへむをさるる人々をいひまのいひ
 ぶのいひ^{道長}又入^道殿は^ミ嶽^{タケ}にまるせ路いひ道
^帥殿の方より^道便^ビちたこやあらるるをいひまのいひ
 ねよりいひまはるるをいひまのいひまのいひ
 らせ路いひまのいひまのいひまのいひまのいひ
 かせだいひまのいひまのいひまのいひまのいひ
 ららひあへむをさるる人々をいひまのいひ
 びんをいひけきとまをいひまのいひまのいひ

しるは書きよむしつてはなほしつて又ちかきしつてい
やほしつてながちまてしつてく雙六はけしつてま
ついでいやはちりしつてあそばせしつて雙
六の秤めしつておしつてはなほしつて
よもしつてあそびしつて見えしつて殿をばめなりて
まゐりしつていふあそびしつてけんえなりけしつて
うりの事を書きしつてはなほしつてしつて
もてしつてせしつていふ道はあそびしつて
けしつてはなほしつてはなほしつていふしつて
らんしつてはなほしつてはなほしつて

ゆてしつてはなほしつてはなほしつて博奕しつて
しつてはなほしつてはなほしつてはなほしつて
ませしつてはなほしつて夜半ヨナカ曉アカツキまであそびしつてはなほしつて
あそびしつてはなほしつていふしつてはなほしつて
と人しつてはなほしつていふしつてはなほしつて
しつてはなほしつてはなほしつてはなほしつて
道はあそびしつてはなほしつてはなほしつて
しつてはなほしつてはなほしつてはなほしつて
まじかやうのしつてはなほしつてはなほしつて
あそびしつてはなほしつてはなほしつてはなほしつて

とくうしんみまえんびくとう、母北方にをちりし遺言^{ユキゴト}
終ひくもか、ごれ君達大姫君を高松^{明子}殿の春宮^{頼宗}大夫殿
の北方ありあましこの君をちりしみづけたりひめ
り、それちりしつる事ちりしび今一所ハ大宮に
まわりて帥殿の位しこていやちん事ちりては
あらし終ひあましうハなげしつけぬ有ありさま
ちめまらちりしありの「男^{道雅}君ハ松君とてうまれ
あまししより祖^{ホト}父^ゲ松^{道隆}といみどきおれりなごり
るむいしあてまつり終ひあましむびむらりなごりおれ
させちせあましは乳^ト母^トも響^{キヤウ}應^{オウ}し終ひし君とてし

とけごらと位しおははひめらちの君を父^イ松^周とてあ
るしこ我^{ワガ}ちちりし世^セありあましきむちをせび又
身^ミまてつしこておはなごえぬ名^{ミヤウ}簿^ブうらて
わづおもてふせしいさちありしつどかふるうか
しと人^{ヒト}しついのそせちんる世^セの中^{ナカ}にありわび
ちんきりし出家^{シカ}の^ダかりり、ちちりしいひおせ
終ひくもか、ごれ君^後當代^一の東宮^院にそおはし、ましを
るの亮^{スケ}ちり終ひくいやめちん事と見奉
るしほごり、春宮^{スケ}亮^{ミチ}道^{ミチ}雅^{マサ}の君とていそおがえたハ
しちりし、それしつるし位^イしつる世^セ終ひし

まはりり、歳人の頭もさなり終まで坊官の勞より
位をとり志終ひて、中将をたふえのけいあまはらば
りたりしころいひやうのいふころ、あたまのいひ
りけぬ事ともいひぬは君故帥の中納言惟仲の女
ぞきみ終ひて、男一人うませぬまへしし、法師
にく明尊僧正の庄房よりころおをひめま、女思ひの
が思ひ終ひつらん、みそつりになどて、今の皇后宮よ
ころうまわりて、大和宣旨とてらあつひ終ひつる事
さきだてまららの妻ふとやういふもむねのいふ事
中そまじしもいふあはれつりてまじしむねもいふ事

しけきあつきたまはれが童部のさつりり侍りたま
しつだ、白髪をさそり鼻をのつたね、ちまも
よれ人よりそのいひむらり、名のまへに、かれがや
もつる、し終ひぬ、ころあたまはらむ、かめおちや
りり、志き終ひつらん、そのいひも、しをわたり、あ
君をさし、肉のうま、しをせ終ひつらん、七夜、和歌の
序代、のせ終ひつらん、ぞり、中、心をたふる、あま、本
躰をまらり、せ終ひつらん、まを、うけり、し、出終ひま
ま、が、く、の、人、め、を、つ、け、ま、り、て、い、つ、に、お、が、い、し、ん、
ち、に、せん、り、ま、わ、り、終、ひ、つ、る、ぶ、と、の、こ、ま、も、し、終、ひ、つ、ら、

いやはしこもたふたをあしびやうまにたの入道
殿をちやあつていひます。ついでともちりさきえ
させ給ふういありてふくちをめでしきううせ
たまうてまうい當座のちおもてを優よてういさう人
人ゆゑにや給ひたれば帥殿伊周のち一振の十七にて中
納言にちりながりてせの中のちづれもいひていさ
らまうい隆家の殿のち童名ハ阿古君がかりば兄殿のちの
ちりすかきもて出雲の權守にちりて但馬すうちを
せし帥殿のちを給ひしきりば殿のちがまたまうて
ちやの中納言すちりてまう兵部卿ちをさういさ

えちせしうそれをいみじうたまういおらひとぞ世人
すたもい給ひしきりたもいの人々下臈ゲロウすちりて
あしきもまういへたがもいさうちりてさうい
てあまのせ給ふす。ちが茂請よはしすまうい
ちふすむいすちりてなほいさういさうい
殿道長のち車すのせ奉らせ給ひてち抽活すまうい
るついです。いさの事ハたのまういすちりて
あつてさうい世間ヨシナカふをいひ侍りけるうすちりて
ちがういさういさういさういさうい宣旨
ちりぬ事す言ふさういさういさういさうい

此は社にのりて参りしや天道も人知らんと
おそろしむる事とまゝあやうのいふまゝせしむ
申しりたもそなたのいふまゝにせしむるがえ
ところ、後りのいふまゝにせしむるがえ
まを、ちやうにまをせしむるに、師殿より
までもや、いふまゝにせしむるがえ、申納言殿より
うりえ、ちやうにせしむるがえ、いふまゝに
まを、ちやうにせしむるがえ、申納言殿より
事とちやうにせしむるに、入道殿の上門殿より
るり、ちやうにせしむるがえ、申納言殿より

うりえ、ちやうにせしむるがえ、申納言殿より
させ給ふほど、酒杯サカヅキあま、たゞいふまゝに
き給ひて、紐を、ちやうにせしむるがえ、申納言
まゝなり、給ひ、まを、ちやうにせしむるがえ、申納言
どせ、まを、ちやうにせしむるがえ、申納言
ぶき、給ひ、まを、ちやうにせしむるがえ、申納言
還トウ留リウし、給ひ、まを、ちやうにせしむるがえ、申納言
んと、ちやうにせしむるがえ、申納言殿より
て、隆家と、不フ運ウンち、まを、ちやうにせしむるがえ、申納言
うりえ、ちやうにせしむるがえ、申納言殿より

あまのついでに人へはけしむるはるに路の申に今
の民部卿^{俊賢}をさうはらふて人へはけしむるはるに今
又路のついでに人へはけしむるはるに今
おがしむる入道^{道長}殿をさうはらふて人へはけしむる
うやうのたをさうはらふて人へはけしむるはるに今
あまのついでに人へはけしむるはるに今
なまのついでに人へはけしむるはるに今
あまのついでに人へはけしむるはるに今
あまのついでに人へはけしむるはるに今

いふにさうはらふて人へはけしむるはるに今
のあまのついでに人へはけしむるはるに今
あまのついでに人へはけしむるはるに今
あまのついでに人へはけしむるはるに今
あまのついでに人へはけしむるはるに今
あまのついでに人へはけしむるはるに今
あまのついでに人へはけしむるはるに今
あまのついでに人へはけしむるはるに今
あまのついでに人へはけしむるはるに今
あまのついでに人へはけしむるはるに今

チありしころをば入道^{道長}のほろのえのりけらま
ぢりけるにころい三條院の大嘗會^{ダイジヤウエ}のほ襖^{タイ}ちめ
つせ路^{チセ}のりちまれどころいひりちまれどころい
人のちまれどころいちまれどころいちまれどころい
ひありちまれどころいちまれどころいちまれどころい
りちまれどころいちまれどころいちまれどころい
幸^{ヒトヘギヌ}ちまれどころいちまれどころいちまれどころい
單衣^{ヒトヘギヌ}ちまれどころいちまれどころいちまれどころい
ふぢりけるにころい表^{ウラ}のほかま龍膽^{リウタン}の二重織物^{フタヘオリモノ}ちま
いぢりけるにころいちまれどころいちまれどころい

あしりかちりちまれどころいちまれどころいちまれどころい
しちまれどころいちまれどころいちまれどころいちまれどころい
る大貳^{ダイニ}の關^{カウ}いぢりけるにころいちまれどころいちまれどころい
人の目^メちまれどころいちまれどころいちまれどころいちまれどころい
ころいちまれどころいちまれどころいちまれどころいちまれどころい
ほ時^{トキ}ちまれどころいちまれどころいちまれどころいちまれどころい
ちまれどころいちまれどころいちまれどころいちまれどころい
伊豫守^{カネスケ}兼^{カネ}貞^{サダ}のぬちまれどころいちまれどころいちまれどころい
女君^{メグミ}ちまれどころいちまれどころいちまれどころいちまれどころい

かろえさせ給ひたるをいみじとたぼりあるはまもいと
しをいまきまらむとあるのやうなり此帥殿のはは
かうやいふ君もさういふあまもたらしむと頼親の肉
蔵頭周頼の本工頭ちとしい人あはよりさく
ちり給ひて今いふ兵部大輔周家の君ばつり
ふのめを給ふめりふ一条院の宮達のは乳母の夫
て院の格勤とありひ給ふいやうのこも
井手の少将好親とあり君も出家と給ふとの
故關白殿はさういふおきといやうるはくあでに
おはしましとたぼり給ひ給ふあやうくはいのちもみ

トかくたらしめり今の入道一品宮とこの帥の
納言殿のこさういふのさういふせ給ふめき
右大臣道兼
あのおやとさういふ大入道殿の清二郎栗田殿と
さういふえはらめりさういふ長徳元年乙未五月二日關
白の宣旨かういふせ給ひて同月の八日にさういふ
せ給ひたはらとさういふ二十五とさういふ大長
の位
さういふ五年關白とさういふ七日さういふおは
此殿はさういふの族とさういふやういふせ給ひ
ひたかくたらしめりさういふあやういふ夢のち

とほひきながりのちこむらぬきくもへつとた
りませ路くもむたふりしりたもまへしたも入るは
らもくいらいもむもへるもまへらまへはまへた
らまへらももむららちもへらもへらまへまへは
らもへらららららららららららららららららら
まぢせゆせいせいせせいせいせいせいせいせいせい
宮の右大は^実左のほまららららららららららららら
らららり母屋のほ^ま簾ならららららららららららら
ま路へりふららららららららららららららららら
のいあやーくはりてららららららららららららら

ねむがらららららららららららららららららら
はけてらららららららららららららららららら
どはららららららららららららららららららら
でちんまららららららららららららららららら
はまぢ^{オホヤケ}ごららららららららららららららら
らら大小の事とヤ合せんともむらららららららら
らら^レををえはららららららららららららららららら
肉やはつらららららららららららららららららら
はららららららららららららららららららららら
らららららららららららららららららららららら
らららららららららららららららららららららら

いさ不便フビシなるわざうねむ思ひ〜、風のほ簾スを吹
あげぬま〜をぢまより入しき〜あだちぢり
のおもたやまをうけ給ひさげまぢいのでかゝ
はいろをたごひてま〜か〜なはひる人をもた
がえび〜は外〜おガク覚ガクにちり給ひあたりとん
え給ひちがうなご〜ふべたご〜もの〜ま〜
ちんおちまきちるま〜とちり、後〜あ〜り給ひ
まこの粟田殿アハの庄男フトコ君達キニタチ三人がおはせと、太郎君
と福足フクタリ君とや〜をちる人ちりのとちりほや
おも〜が〜い〜あ〜ま〜く〜また〜あ〜く〜ぞ〜

せ、東三條兼家殿の庄アハか〜び君舞マをせし奉らんこと
ち〜はせ給ふふ〜あや〜の〜ま〜
よろは〜お〜づりいりのをち〜こ〜
〜その目よ〜り〜い〜ま〜ら〜奉り給入
ふ〜舞マ臺ダイの上〜お〜が〜給ひて〜け〜調テウ子シ吹フいづ
るほ〜お〜は〜い〜れあまはまは〜こ〜び〜づら
ひき〜づり、庄アハ將末マサノをほ〜こ〜ひ〜やり給ふよ
粟田殿アハ庄アハまあまを〜と〜せ給ひてあまに〜あ
ぬはけ〜ま〜ちりあ〜り〜い〜ん〜お〜も〜ら〜る〜よ〜見
給〜が〜い〜ま〜や〜も〜ち〜ら〜、庄アハをぢら〜中ナカ白シロ殿ノ

ねむりて舞臺のほろせ路へをいひねこづせ路ふ
ぶきつ又ふらちよえあひ追ねらちせ路ふべたふ
うこくえ侍りしふらの君を腰のほろせ路へきつけ
させぬまふして居てづつらみどくまらせぬまふ
ころ、樂をまたりておもころくおれ君の恥もかくれ
其日の興もさやみの外へはさりたりけき祖父殿も
きとれづたりたり、又おやぶいさうおりのよう
の人ふふころすころり感と奉りたれやう
人のいぬちむしきささるねはまらる
にちぢはすさのきちせ路へららるおれ君へ

ろあま蛇まうと終いて、それぬまふりより、から
り物をいころせ路へまけたは弟の二郎ぢご今の
左衛門督兼隆卿と大藏卿の女のはらちりけ左衛門
督の君達男女あまのねはらちり、大姫君と三条
院のこのあひ敷平の中務の宮を、つげきけららぎ
のころ、舞ごりなまり終へるふごり、いとよきお中
りておれぬめり、又姫君四人ねらら、又粟田殿乃
三郎前頭、中將兼綱の君、其君も祭の日調どぬ
まへま車ころいやをかころり、綱代とい
ふもねをけり、的のつたろころり

一車のよもしらまのふら哉らの形カタをきつてふら
をを矢の形カタをせしむるはまは興ケウあり
あり、和泉式部イツミシキブの君歌よまはして侍りき
十はらばまねらねども君のまは車もまはたえゆも
はてよまた風流フウリウとんえまのふ人のまらちのめも
のよまは茂カモの明神の矢めおひ給へりといひ
てまのをいや便ビニちてやにまはる君の頭トウを
まはるまはしいやいみじう侍り一奉ホウごか頭トウよ
ありておごらまきよらまはるねどもある
べき事コトにまはる栗田道兼殿花山院ハナヤマノイノのたけ

奉り、左衛門督兼隆一条院イツチョウすのたけまの給へり、帝ミカド
東宮の也あつりまのつのでありぬむたはまらやの
ふ事いごまらふかいや稀カ有カり侍りまはる
まをキコシタシ食タシちりたる事ちまはる男君達オトノミのり女
君と故一条院の乳母ヌメの藤三位フジサウのはらりたけま
一もまをまはるまの時トキのまらまの女メは
まら後ノチこの大藏卿ミナタウ通任トウニの君の北方ホクホウにてうせ
まらにまらまらむらり佛神ハツカミをまら
まらまらまらまら君ミコいまの仲ナカ宮ミヤり、二条殿ニジョウのま
方カタまらまらまらまら父チチ及カミ女子メノコをほ

つりて願をなしたまひし。のち此の御事ありて
あるまじき御事なむにまじかやうにあらまはる
事ごも世に傳へるごか。ふれ為の北のこの粟
田殿より後と堀川殿の子の左大臣顯光の方にて大
その年ごらねははとまき奉りてその御事
る九条殿の子の大藏卿遠量の君の女ごの御事
の栗田殿の御事ありはまぶと外にてあましくねは
ましたるを御事とらいたまはせしむる御事
くして人あそいんごねらるまはせしむる御事
くは急ちてやまはる御事なむたば後父ねらる御事

と土殿ツチノちごにをもちせ給ふ。あはれまふこと
ては簾スごもあげ渡して御念誦ネンズちごに給ふ
はるごた人ごよびあつめく後撰古今ひらげく興キョウ
言ゲンあそびひらけ御事なむせ給はらうけり。そは
ゆゑに花山院を我らうはすのちらうまひた
まざれを聞白を申せ給ふ。たごりごいふ御
うらみちりけり。よづらぬ御事なむりや。はまむか
らぬ御事ごもすえを傳道細殿に入道道長殿ふこと
る如法に孝タカミに奉り給ふことごうけあまひりし

